

ケネス・アンガー  
マジック・ランタン・サイクル



## 特集: ケネス・アンガー / 大いなる異端

『マジック・ランタン・サイクル』そして彼の表現に共振するアーティストたち

「アンガーは『ハリウッド・バビロン』でハリウッドの神話を完成させた。」/ 柳下毅一郎

「映画の中に自分のための快樂殿を創造した男 ケネス・アンガーの毒は、あとで効く。」/ 川勝正幸

鈴木ヒラク / 河村康輔 / 大久保清朗 / 伊藤桂司 / スケートシング / 服部一成 / いすたえこ / 釣崎清隆 / 結城秀勇 / 五所純子





## Introduction

アンダーグラウンド映画の系譜において伝説的存在を欲しままにする映像作家ケネス・アンガー。デレク・ジャーマン、ジャン・コクトー、ミック・ジャガー、デヴィッド・リンチ、デニス・ホッパー、ガス・ヴァン・サント、マーティン・スコセッシ、アンジェラ・ミッソーニ……時代を越え、ジャンルを越え、名だたるクリエイターにアンガーの呪術的イメージは今なお多大なる影響を与え続けている。

今回リリースされる彼の映像作品の集成『マジック・ランタン・サイクル』には、神や道化師、無骨なバイカーたちといった様々な登場人物からなる映像作品が収録されている。登場人物は異なれど、どれも彼が若き時代を過ごした無声映画全盛のハリウッド映画への憧憬と、現実の世界への疑い、居心地の悪さのようなものを重ねあわせ、夢の中の物語のようにロマンティックに仕上げている。一見攻撃的で反逆的なイメージの強い彼の映像だが、これらの作品からは、あくまで個人的な体験・自らの皮膚感覚を元にして制作されているのだらうというのが手に取るように伝わってくる。だからこそ、異端と呼ばれながらも、アンガーの表現は今なお強いインパクトを与え、インディペンデント映画を変革した人物として、これからも強い磁場を持って私たちを惹きつけて止まないのではないだろうか。

# Who is ケネス・アンガー？

1927年2月3日、カリフォルニア州サンタモニカ生まれ。本名 Kenneth Wilbur Anglemeyer。三人兄弟の三男。ハリウッドでサイレント映画の衣装担当として働いていた祖母の影響で、映画や芸術への興味を持ち始める。祖母の友人であったマックス・ラインハルトが監督した『真夏の夜の夢』（1936）には、子役として出演。10歳頃から16ミリカメラで映画を撮り始め、『Who Has Been Rocking My Dreamboat』（1941）や『Tinsel Tree』（1942）などを監督。ピバリー・ヒルズ高校を卒業した後、1947年に『火花』を製作。初の公開作品となる。その後製作した、『ブース・モーメント』（1949）『ラビッツ・ムーン』（1950）『人造の水』（1953）『快楽殿の創造』（1954）『スコピオ・ライジング』（1964）『我が悪魔の兄弟の呪文』（1969）『K.K.K. Kustom Kar Kommandos』（1970）『ルシファー・ライジング』（1972）の9作品は『マジック・ランタン・サイクル』としてまとめられ、アンガーの代表作となった。1959年、アンガーはハリウッドのゴシップを書籍にまとめ『ハリウッド・バビロン』と題してパリにて発行。しかしアメリカでは1975年まで発行されなかった。1967年、チャールズ・マンソン一味によりフィルムが盗まれたことによって映画製作への意欲を失い、ニューヨークのヴェレージ・ヴォイス誌に“In Memoriam Kenneth Anger 1947-67”と書かれた自身の死亡記事広告を打つ。その後ロンドンに移り住み、ミック・ジャガーやマリアンヌ・フェイスフル等と出会い、映画製作を続けた。1982年から1999年まではニューヨークを拠点に、『ハリウッド・バビロン2』（1984）の執筆や世界中の映画祭への出席など、映画製作から離れた生活を送っていた。しかし2000年に入ってから映画製作に復帰、2011年現在までに既に10本以上のショートフィルムを完成させている。近年では、ロサンゼルスにてミュージシャンのブライアン・パトラーと共に、“光とサウンドの魔術的儀式”である「Technicolor Skull」を結成し、アンガーはテルミンを演奏、各地でライブを行っている。

80歳を越えた現在も尚、アンガーはショートフィルムの製作を続けており、近年では軍服についての作品『Uniform Attraction』、サッカーのウォームアップを題材にした『Foreplay』、2003年に自殺した友人でもあるシンガー・ソングライター、エリオット・スミスについての作品『Elliott's Suicide』などを発表している。



Kenneth Anger / Magief Eantzen Cylic

## アンガーは『ハリウッド・バビロン』においてゴシップ的なことを語ることにより、ハリウッドの神話を完成させた。（柳下毅一郎）



ケネス・アンガーがハリウッドの黄金時代のさまざまなスキャンダルを記した『ハリウッド・バビロン』が2011年3月待望の復刻。復刊版の解説を担当した映画評論家の柳下毅一郎氏と、同じく映画評論家の大久保清朗氏によるトークショーが渋谷アップリンク・ファクトリーで開催された。

アンガーは今作において、グレア・ガルボ、マレーネ・ディートリヒ、チャールズ・チャップリン、エリザベス・テイラー、マリリン・モンローなど名だたるスターたちのセックス、酒、ドラッグにまつわる逸話を積み重ね、もっとも栄えていた時代のハリウッドの内幕を数多くの写真とともに暴露した。

日本では1989年にリポポートから翻訳が出版されていたが、長きにわたり絶版となっていた今回の待望の復刊にあたり、柳下氏による解説を追加。『映画を愛するすべての人へ』『映画に悪かれたすべての人へ』という帯のコピーがふさわしい、ケネス・アンガーの映画への偏愛をたっぷりと感じることのできる内容となっている。

### ハリウッドスターになりたかったけどなれなかったアンガーの恨み

柳下：『ハリウッド・バビロン』は、1959年にフランスでフランス語版が出たんです。当時アンガーはフランスにいたんです。なぜかというと、その前、1947年に「火花」という、たぶんアメリカで最初のゲイ映画を20歳のときに撮った。要するにゲイの美学を初めて全面に押し出した映画ですね。

大久保：それまでも西部劇やフィルムノワールなどにちょっとゲイっぽい表現があったりしますけれどね。

ケネス・アンガー『ハリウッド・バビロン』

柳下：もちろんそれまでもゲイの映画作家はいましたけど、アメリカでは基本的にゲイは恥ずべきものと考えられていたし、ハリウッドではヘイズ・コードの制約があって表現できなかった。そういう状況で、アンガーははじめてホモセクシャルとSMの美学を映画にしたわけです。アンガーはマゾヒストなので、『火花』では筋骨隆々の水兵にアンガー本人が殴られたりする。それを美しくセクシーに撮ってみせたわけです。そんな映画だったのでまともには上映できなかったんですが、こっそりやった秘密上映会で、テネシー・ウィリアムズやジャン・コクトーに絶賛されます。しかしだからといってそれで仕事ができるわけではない。そこで、コクトーの推薦状をもらってフランスに行くと、シネマテーク・フランセーズという世界最初の映画の博物館を創設したアンリ・ラングロワのところに転がりました。アンガー本人もすごい映画マニアだったので、シネマテークの資料を整理しながら、そこで映画を作ろうとしたんです。いくつか撮り始めたものもあったんですが、企画がすぐ頓挫して消えちゃう。それで生活費さ

え事欠くような状態になったので、じゃあ自分の知ってるハリウッド・ゴシップを使ってスキャンダルな本を1冊でっち上げよう、と考えた。それが『ハリウッド・バビロン』だったんです。本の中にも子役時代の写真が出てきますが、彼はハリウッドで生まれ育って、サイレント時代のハリウッドの空気を呼吸しているような人だったから、ゴシップーなことはいっぱい知っていた。

大久保：そこにラングロワの資料もあったということですね。

柳下：『ハリウッド・バビロン』は50年代の赤狩りまでで、そこでハリウッドの黄金時代は終わったっていうわり方なんです。それ以前、ハリウッドがまさに神だった時代に、実はものすごく乱脈なことが行われていた。『ハリウッド・バビロン』には神聖冒濫的な側面があると言われてますね。チャップリンがロリコンで、少女にフェラチオさせていたとかいう話を書いて、チャップリンという聖人みたいな存在の仮面をひっぺがす、そういう部分があるんじゃないか。アンガー本人がハリウッドスターになれなかった、子役として映画に出たのも1本きりで、いろんな理由でハリウッドのインサイダーになれなかった。その恨み辛みをこの本で晴らそうとしてるんじゃないか。そんな風と言われる部分もあります。

大久保：でも、ただ怒りだけじゃなくて、愛もありますよね。

柳下：そう。そういう側面があるのは間違いないけれど、一方で、ゴシップ的なことを語ることで、よりハリウッドの神話を完成させるという意味もあるんじゃないか。つまりハリウッド神話をオリンポスに住むギリシャ神話の神々のようなものとして見ているのではないか、というのは、ギリシャ神話の神々ってものすごい人間臭いですね。ゼウスって変身してひたすらセックスすることしか考えていないひどい神なんだけれど、それは人間臭いってことでもある。我々人間の欲望を代行してくれる、いわばロールモデルとしての神ですよね。人間の行動をより大きなスケールで繰り返す。あるいは我々にできないことをやってくれる存在なんです。

スターが巨大なスクリーンで演じてくれるものを観る。彼らは我々にはできない巨大なロマンス、巨大なアクション、巨大な冒険、巨大な欲望を達成する。ゴシップもその一部あって、我々には不可能な、スケールの大きなことをやることで、人間以上の存在になっていく。つまり『ハリウッド・バビロン』はゴシップによって、スターをさらに巨大な存在に書き換えていくんですね。

### ハリウッド・ゴシップを象徴読解したものが『ハリウッド・バビロン』である

大久保：普通ゴシップは引きずり下ろすみたいなのところがありますが、アンガーがやるうとしていることは、むしろよみかねのできないスケールの大きな神話の完成ということがある。『ハリウッド・バビロン』はアンガーが完全に生活の為に書いたということで、多くの人は映画は映画、本は本だと思ってるんじゃないかと思うんですけど、柳下さんの中ではリンクしているんですね？

柳下：そうですね、つまり、アンガーってアレイスター・クロウリーに傾倒していた魔術師じゃないですか。魔術というのは何か。それは言葉あるいは呪術によって、自分の欲望を実現させる行為である。呪文を唱えることによって、なにかを起こすということですよね。アンガーの場合は言葉

だけじゃなくて映像によって、観客の情動を変化させる。それと同時に象徴読解という面があります。フレイザーとか比較神話学的な話になるんですけど、『ハリウッド・バビロン』だったんです。本の中にも子役時代の写真が出てきますが、彼はハリウッドで生まれ育って、サイレント時代のハリウッドの空気を呼吸しているような人だったから、ゴシップーなことはいっぱい知っていた。

ケネス・アンガー『ハリウッド・バビロン』

例えば太陽は男性原理で月が女性原理である。ということは『ラビッツ・ムーン』でピエロが月を見て恋焦がれているのは女性に焦がれていることを意味する。そういうかたちで映画の表象を神話的な象徴として読んでいくことで新たな神話を創りだす、というのが『ルシファー・ライジング』だったりするわけです。この映画は、エジプトの神話から始まって、天地創造が語られ、エジプトの死の神と生の神とが出会って云々という話なんです。エジプトだけじゃなくて全ての神話においての原型的な話がその上に重ねられているわけです。そうやって魔術を語っていく。ハリウッド神話というものも、単に格好いいスターがいるとかそういうことじゃなく、実はそこには象徴としての意味がある。そのハリウッド・ゴシップを象徴読解したものが『ハリウッド・バビロン』じゃないか思っているんです。

ケネス・アンガー『ハリウッド・バビロンII』

例えばD・W・グリフィスは『國民の創生』によりアメリカ最大の映画作家になったけれど、『イントレランス』により興行的に大失敗して破滅してしまう。そうしたハリウッドの歴史がある。しかしそれは、ひとつの教訓であり象徴なんだと、『イントレランス』の巨大なセットそのものがひとつの象徴なんだということはこの本は語っているわけです。まさにハリウッド・バビロンの象徴として『イントレランス』がある。あれは産業的な失敗ではなく、神が審りたかぶったハリウッドに対する天罰なんだと、それはアンガーの妄想なんです。でも、妄想のほうが楽しい。やっぱり妄想によって自分で神話を作り上げていく行為をしていかないといけない。別に世の中に意味なんかないんですよ。でも、人間が生きてゆく意味をもてるとしたら、それは妄想によってストーリーを作り上げていくことによってしかない。安易なストーリーはつまらないですよ。でも人間の行為に意味を持たせられるのは人間しかいない。本当は個々の事件に関連はないんであって、歴史を作れるのは人間の妄想だけなんです。

ケネス・アンガー『ハリウッド・バビロンII』

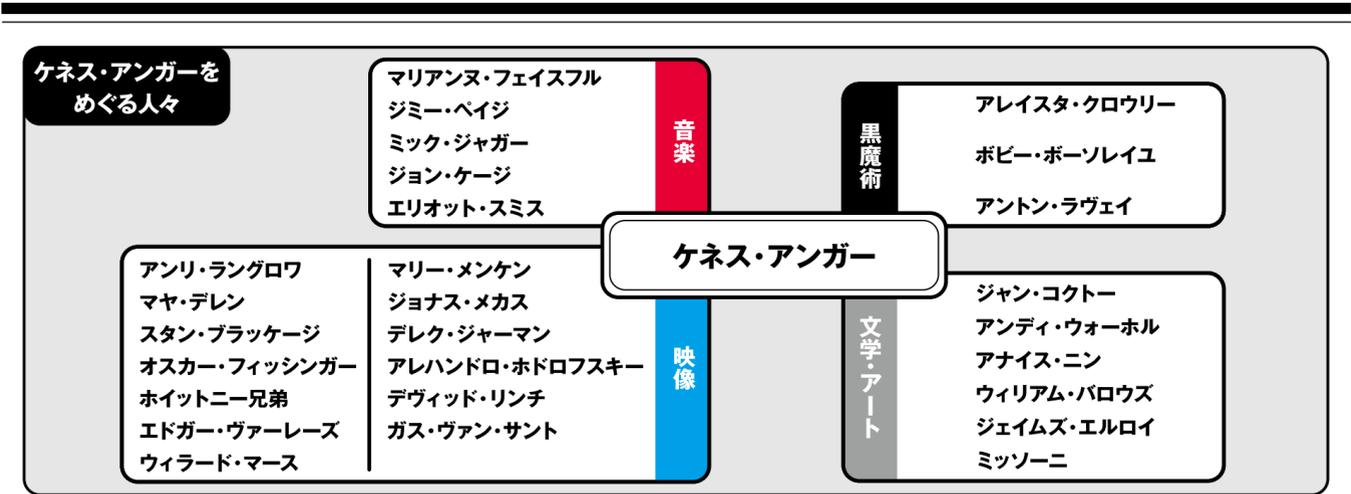
『ハリウッド・バビロン』が成功したおかげでその後、いっぱい『ハリウッド・バビロン』方式の本が書かれましたけど、そういう本は基本的に単なるゴシップの羅列でしかない。でも『ハリウッド・バビロン』は明らかに歴史なんです。それはアンガーが個々の事件を取捨選択し、ある部分を誇張し、ある部分を小さくして、物語、歴史として書いているからなんです。

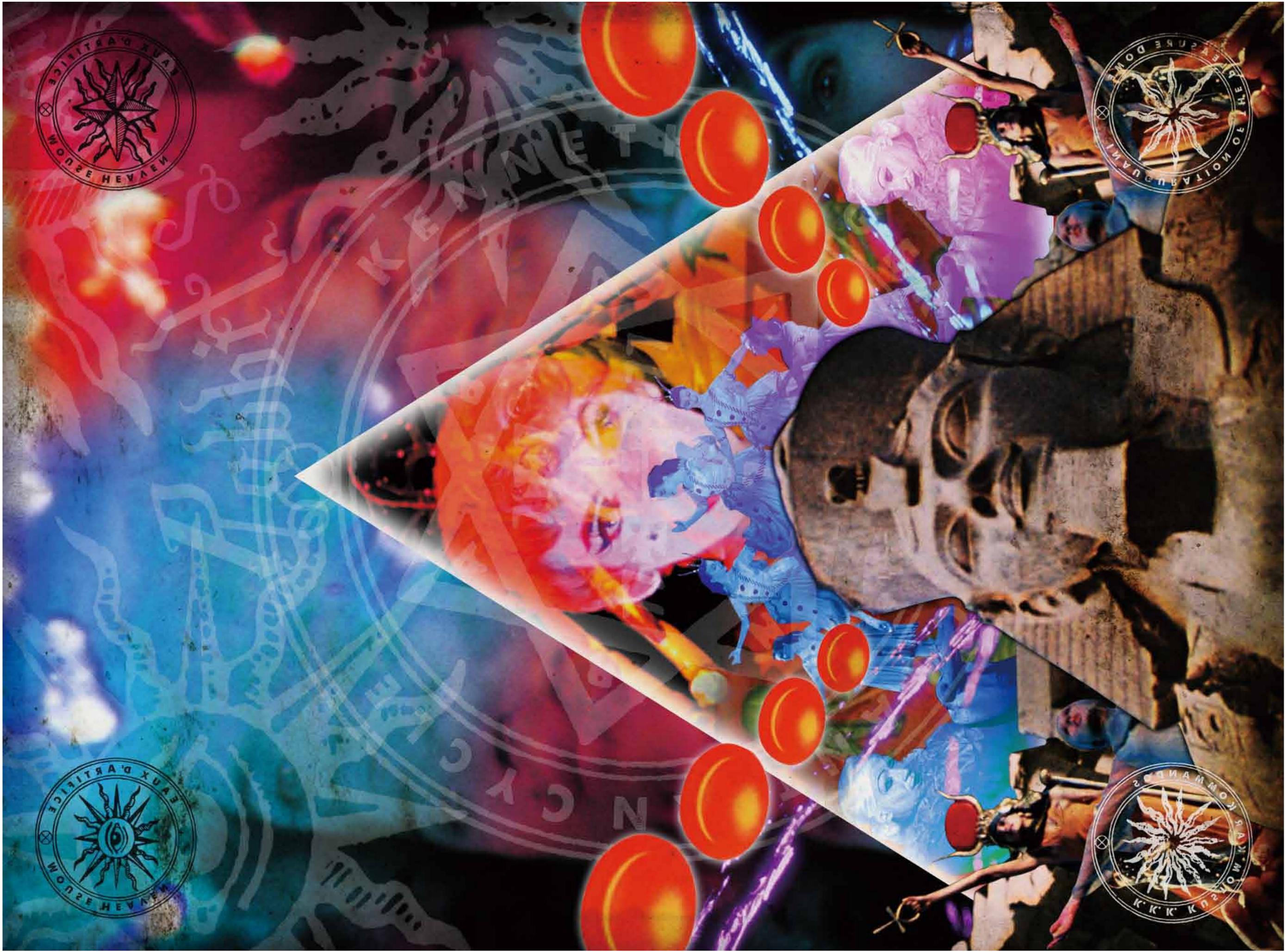
（2011年4月7日、渋谷アップリンク・ファクトリーにて）



ケネス・アンガー『ハリウッド・バビロンI』
 訳：明石三世
 ISBN：978-4-89194-881-8
 本体：2,200円
 版型：177×111ミリ
 ページ：464ページ
 発行：PARCO出版

ケネス・アンガー『ハリウッド・バビロンII』
 訳：明石三世
 ISBN：978-4-89194-882-5
 本体：2,200円
 版型：177×111ミリ
 ページ：544ページ
 発行：PARCO出版





## 映画の中に自分のための快樂殿を創造した男

# ――ケネス・アンガーの毒は、あとで効く。

文:川勝正幸（エディター）



## アンガーという暗号

日本でも、ついにケネス・アンガーの主要映画作品集が『マジック・ランタン・サイクル』と題してDVD化される。しかも、去年、米FANTOMA FILMSから発売された『THE COMPLETE MAGIC LANTERN CYCLE』にも未収録であった『マウス・ヘブン』を含む特典映像も付くという。

昔むかし。映画は映画館でしか観ることができず、中でもアンダーグラウンドな映画は、情報誌『シティロード』や『ぴあ』を片手に、地図を見ながら特別な場所へ足を運ぶしかなかった。

僕が初めてアンガーの『スコピオ・ライジング』(64年)をはじめとする作品群を体験できたのは、映画評論家/映画コレクターの佐藤重臣(しげかみ)。愛称はジュージン)氏(32～88年)が70年代半ばから主宰した「黙婁子(もくこす)フィルム・アーカイブ」のおかげだ。トッド・ブラウニング監督作『フリース』(32年)も、ジョン・ウォーターズ監督作『ピンク・フラミンゴ』(72年)も、ここで観た。背伸びをした大学生に、アンガーの世界が深く理解できたとは思わない。表層に触れただけだろう。しかし、「黙婁子」のホームグラウンドは<アートシアター新宿>という、今は亡き「新宿厚生年金会館」の裏手にあり、上映形態は16ミリ・フィルム――環境の磁場も含め、異界感が高く、博多から上京した中産階級の息子にショックを与えてくれた。

とはいえ、先ほど、自宅の40インチの“世界の亀山モデル”で『スコピオ・ライジング』を観たが、そんなノスタルジーもぶっ飛ばす中身だった。ヴァンギャルド映画の中でも、技法に重きが置かれた作品は、当時は“実験”、または、“前衛”だったかもしれないが、現在の目で観ると、古びてしまっているものが少なくない。ところが、アンガー作品はそれらとは一線を画す。自分の欲望を基に、忠実に、企画・監督・撮影・編集し、時に出演もし、選曲も手がけた、つまり、隅々まで自分の美意識で貫かれた映画は、凡庸な人生を送ってきた筆者の知覚の座標軸にすら、今なお揺さぶりをかけてくる。しかも、あれもアンガー！ これもアンガー！ 自分が大学生から中高年に至る長年の過程で摂取してきた映画、文学、写真……のそこかしこに、アンガーの爪痕が残されていたことを、改めて強く認識してしまふ。

例えば、監督作品ではないけれど、今年の震災前、PARCO出版から明石三世氏訳/柳下一郎氏解説で復刻されたアンガーの著書『ハリウッド・パピロン』(原書：75年)『ハリウッド・パピロン』(原書：84年)をめぐってみよう。“ ”の『ブラック・ダリアが見た悪夢』の文章を読み、売春婦エリザベス・ショートの上のバラバラ死体の写真を見る。この1947年の伝説的な猟奇事件に関する記述は、91年のリポート版でも詳読していたが、ジェイムズ・エルロイが『ブラック・ダリア』(原書：87年/翻訳：90年)に始まるLA暗黒シリーズ4部作を完結させ、ブライアン・デ・パルマがエルロイの小説を原作にした『ブラック・ダリア』(06年)を撮り、ロックスター・ゲームズ社が『L.A. ノワール』発売した2011年に再読したほうが、効きがいいのだ。

この時を経たゆえのアンガー効果の増大は、もちろん、映画作品においても同様だと思う。

## フェティシストとしてのアンガー

まず、『火花』(47年)、マゾヒズムの美青年(17歳のアンガー)が、筋骨隆々とした水兵から“悦びに満ちた暴力”を受ける夢についての映画は、当時、禁断のテーマだったこともあるけれど、直接的な行為を描かず、メタファーに満ちた表現に変換されており、かつ、白黒ならではのソフトな質感により、アンガーと性的ファンタジーを共有できない、『週刊SPA!』は“みうらじゅん？ リリー・フランキーのグラビアン魂”から聞く)自分のような者の目にも、轟感的に映る。

これは筆者の場合、ブルース・ウェバーの写真(82年から始まるカルバン・クラインの広告のために撮った男性ヌードや、83年に出版された第1作品集『BRUCE WEBER』に掲載された若き日のマット・ディロン のポートレイトなど)を見たり、ジャズ界のジェームス・ディーンと呼ばれたチャット・ベイカーについてのドキュメンタリー映画『レッツ・グット・ロスト』(88年)を観た経験のおかげだと思う。アンガーが映画に真空パックしたフェティシズムを、表現として楽しめるようにただの好好きの自分も“成長”したのだから。

## 優れた選曲家としてのアンガー

DVDで初めて観た『ラビッツ・ムーン』には、16分の“1950ヴァージョン”と7分の“1979ヴァージョン”があるが、僕は前者が好みだ。この青味がかった白黒映画はセット撮影なれど、まるで月明かりの下で撮られたかのよう。ウサギが暮らすと伝えられる月をこの手でつかもうとするピエロの身悶えには、ザ・フラミンゴスの59年のヒット曲“I ONLY HAVE EYES FOR YOU”をはじめとする、ドゥーワップの名曲の数々がよく似合う。

ちなみに、本作は50年にパリで撮影されたものの、未完成のまま放置されて、70年に編集・71年に公開された。ロックの祭典“ウッドストック・フェスティバル”の翌年に、50年代半ばから60年代初頭に流行ったドゥーワップを選曲するアンガーのセンスが素晴らしい。

そう。映画監督ケネス・アンガーは、優れた選曲家でもあるのだ。映画に、映画音楽家に発注した劇伴ではなく、既発表のレコードを当てた先駆的作品が、64年に発表された『スコピオ・ライジング』だ。

ストーリーなし、ダイアログなし。カスタム・バイクをチューンナップする華ジャンにジーンズの青年と、自分の部屋のベッドから起きてバイカー・ファッションへと身支度する青年の映像を中心に、マロン・ブランド主演のバイカー映画『乱暴者(あばれもの)』(54年)とセルシ・B・デミルがキリストの最後の1週間を描いた『キング・オブ・キングス』(27年)からのフッテージ、そして、ヘルズ・エンジェルスらバイカーのドキュメンタリー映像、スタッズやスカルやスコピオのイメージなどが、官能的にエディットされていく。

さらに、観客を一瞬足りとも退屈させないのは、例えば、素肌に革ジャンを身にまとう青年のカットにボビー・ピントンが甘々に歌うポップズ『ブルーベルベット』(63年)を、バイカーたちの暴走シーンにザ・サファリズのサーフ・ソング『ワイブ・アウト』(63年)を流す、つまり、レザーとベルベット、バイクとサーフ音――映像と音楽の間に異化効果を出しつつ、歌詞が囁し出す気分の昂揚としては映像と音楽の完璧なリアリズムになっているという、アンガーの魔術的な手腕によるものである。『スコピオ・ライジング』が、その後の映画に与えた例は多すぎるので、2つに絞って紹介しよう。

デニス・ホッパーの監督・助演・共同脚本作『イージーライダー』(69年)は、本当は暗いカウンター・カルチャーの夢の崩壊を描いたバイカー映画だが、この映画が世界的にヒットしたのは、当時、彼が良かった句のロックを使用し、歌詞の意味とシーンをリンクさせるスタイルに負うことが多かったと思う。キャプテン・アメリカとワイアット(ビーター・フォンダ)とピリー(デニス)は、コカインの密売で大金を手にし、ニューオーリンズの謝肉祭(マルディグラ)を目当てに、ハーレーダビッドソンをエクストリームにカスタムした2台のチョッパーで旅に出る。カヌーが、まず、ピリーのバイクのガソリントankを、次に、ワイアットのアメリカ国旗をイメージに塗装したガソリントank、そして、透明のチューブに50ドル札を巻きながら詰めていく様を追うカットには、ザ・ステッパンワルフの『ザ・ブッシュャー』(68年)が流れる。このチョッパーのパーツパーツを視察するが如く映すシーンは、アン

ガーの『K.K.K. Kustom Kar Kommandos』(65年)からも影響を受けているのではないが、青年がもここしたピンク色のパフでカスタムカーを磨く、いや、愛でるだけの3分間の映画に……。

デイヴィッド・リンチの監督・脚本作『ブルーベルベット』(86年)には、アンジェロ・パダラメンティに依頼した劇伴も流れるけれど、アンガーに負けるなどばかりに、ボビー・ピントンの「ブルーベルベット」を見事にリサイクルしている。映画の流れの中で過去のヒット曲に新しい命を吹き込む――このアンガーの手法へのリンチならでは回答としては、もう1曲、オカマのベン(ディーン・ストックウェル)がロイ・オービソンの『イン・ドリームス』(63年)を、工事現場用の電球をマイクに見立てて、当て振りするシーンも挙げることができる。

とはいえ、端末のクラブ歌手ドロシイ(イザベラ・ロッセリーニ)のブルーベルベットのドレスとヘア&メイクは、アンガーの『ブース・モーメント』(49年)におけるハリウッド・スター(イヴォンヌ・マルキス)のファッションとルックスへのオマージュであることが、『THE COMPLETE MAGIC LANTERN CYCLE』を観直して分かった。

## サイケデリック映像作家としてのアンガー

ロジャー・コーマンが監督し、トリップ・シーンだけLSD体験済みのデニス・ホッパーが演出を担当し、エレクトリック・フラッグのロックが流れる『白昼の幻想』(67年)、ジェーン・パーキングが主演し、ジョージ・ハリソンがサウンドトラックを手がけた『ワンダーウォール』(68年)、ミケランジェロ・アントニオーニが監督し、ピンク・フロイドやグレイトフル・デッドらが音楽を担当した『砂丘』(70年)。

いわゆるサイケデリック映画として紹介される映画群と、アンガーの『我が悪魔の兄弟の呪文』(69年)を見比べると、後者の迫力は絶対的である。ストーリーの流れで幻覚シーンが登場するのは違い、はなから悪魔崇拜の儀式を縦糸に、ヒッピー文化とベトナム戦争の映像などがカラージュセされて約11分は、作品自体がドラッグのようである。

本作の危険度を高めているのが、ザ・ローリング・ストーンズのミック・ジャガーがモーグ・シンセサイザーでクリエイトしたサウンドトラックである。今言うループに近い、シンプルな電子音の繰り返して構成されているからなのだ。

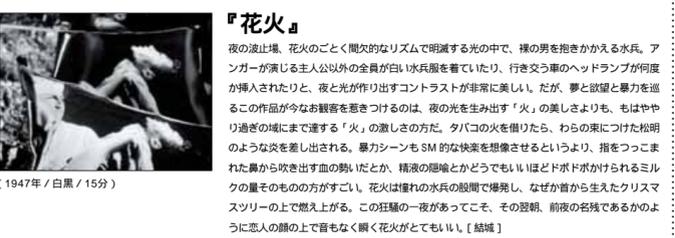
ストーンズは、67年にアルバム『サタニック・マジスティーズ』をリリースし、68年にシングル『悪魔を憐れむ歌(原題：SYMPATHY FOR THE DEVIL)』をヒットさせる。『我が悪魔の兄弟の呪文』に、時々、ほんの一瞬挿入されるストーンズの映像は、おそらく、69年7月5日、ロンドンのハイドパークのフリー・コンサートの模様であろう。その2日前、ブライアン・ジョーンズが急死したため、このステージは彼への追悼の場となった。当時のミックは、“神がかり”ならぬ、“悪魔がかり”のブリック・イメージを持っていた。

アンガーのオカルティズムや、アレクスター・クロウリー(ザ・ビートルズが67年に発表した『サージェント・ペパーズ・ロントリー・ハーツクラブ・バンド』のジャケットにも登場している)仕込みの魔術志向は、当時のロック・ミュージシャンたちにも影響を与えていたと言われている。

「ケネス・アンガーの毒は、あとで効く」とは、あくまで80年前後にアンガーを初体験した筆者の印象だ。柳下氏は<渋谷アップリンクファクトリー>で、『ソーシャル・ネットワーク』(10)の最後で流れる『ビートルズの『ペイビー・ユアー・ア・リッチ・マン』(67)に触れて、『アンガー的な使い方』であるけれど、もはや「誰もアンガー的な使い方という意識はない」、<それくらい影響を強く与えた存在>と語った。そういう意味では、今、アンガーを初体験した人々の感想が早く聞いてみたい。

## 『マジック・ランタン・サイクル』作品解説

文:約崎清隆(死体カメラマン)結城秀典(nobody)五所純子(文筆家)駒井憲剛



2011年の8月27・28日、原宿のVACANTでのケネス・アンガー『マジック・ランタン・サイクル』公開のイベントのために、6人の日本人アーティスト/グラフィック・デザイナーたちがケネス・アンガーをモチーフに超強力なビジュアルを制作。VACANTに訪れた人々が好きな図版を選び、好きな色を用いてTシャツにシルクスクリーン印刷することで、無限のパターンを生み出すビジュアルのセッションが実現した。

# VACANT

原宿「VACANT」  
Tel. 03-6459-2962 / <http://www.n0idea.com/>  
東京都渋谷区神宮前 3-20-13



## 伊藤桂司

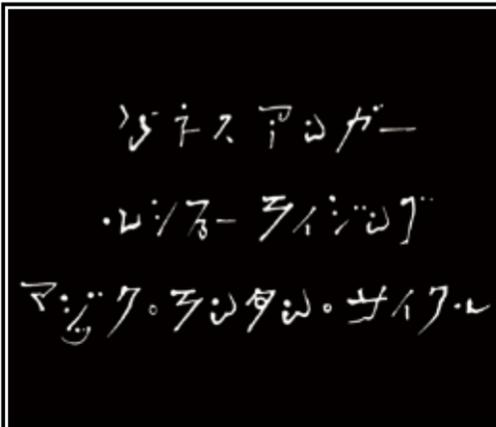
1958年、東京生まれ。主に、広告、雑誌、音楽関係などの分野でグラフィック・ワーク、アートディレクション、映像を手掛ける。2001年度東京ADC賞受賞。ロッテルダム映画祭、「Active Wire. (ソウル: Haja Center)」、「CLOSE UP of JAPAN展」(ブラジル: サンパウロ美術館)、「Buzz Club-News from Japan」(ニューヨーク: P.S.1 / MoMA)、「KITTYEX.展」(森美術館)、「AFTER311」(hiromiyoshii roppongi)をはじめ国内外のグループショーに多数参加。ギャラリー 360、ArtJam Contemporaryでの個展開催、愛知万博EXPO2005世界公式ポスター、コカコーラ・コーポレートカレンダー、NHKの番組タイトル&セットデザイン、イギリスのクラヴエンデール・キャンペーンビジュアル他、活動は多岐に渡る。作品集は『FUTURE DAYS』(青心社)他多数。京都造形芸術大学教授。UFG代表。

<http://site-ufg.com/>



## 服部一成

グラフィックデザイナー、アートディレクター。1964年東京生まれ。1988年東京芸術大学美術学部デザイン科卒。ライトパブリシティを経て、01年よりフリーランス。おもな仕事に、『キュービーハーフ』の広告、雑誌『流行通信』『here and there』『真夜中』のアートディレクション、『ホンマタカシニュー・ドキュメンタリー』展(金沢21世紀美術館ほか)のグラフィック、『三菱一号館美術館』『ユトレヒト』のロゴデザイン、中平卓馬写真集『来たるべき言葉のために』『プチ・ロワイヤル』和辞典のブックデザインなど。



## 鈴木ヒラク

1978年生まれ。膨大なドローイングをベースに、壁画・インスタレーション・映像・彫刻など多岐にわたる制作を国内外で展開、ドローイングの新たな可能性を拡張し続けている。近年の主な個展にWIMBLEDON space(ロンドン,2011)、ギャラリードゥジュール(パリ,2010)など。主なグループ展に『六本木クロッシング』森美術館(東京,2010)、『愛についての100の物語』金沢21世紀美術館(石川,2009)、『House of Art』Hotel Central(サンパウロ,2009)、『Between Site & Space』ARTSPACE(シドニー,2009)などがある。また音楽・ダンス等とのライブパフォーマンスや、アニメ・ペーパー・コム・デ・ギャルソンといったファッションの分野とのコラボレーションでも知られる。著書に『GENGA』(河出書房新社)、『鉱物探し』(BEAMS)。

<http://www.wordpublic.com/hiraku/>



## 河村康輔

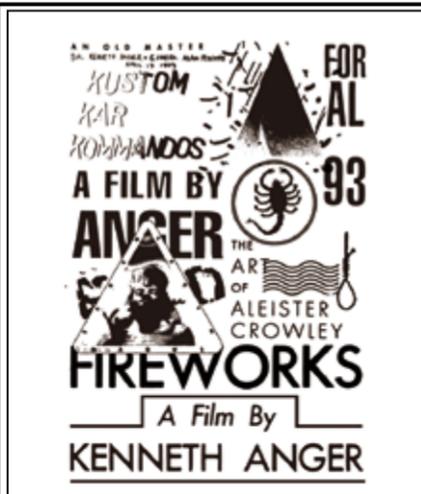
1979年広島県生。デザイナー、特殊デザイナー他プラス・ワン、コラージュ・アーティスト。06年、根本敬氏個展『根本敬ほか/入選!ほがらかな毎日』入選。ERECT magazine アート・ディレクター兼、企画。アパレルブランド『NADA』グラフィックを手掛ける。様々なライブ、イベント等のフライヤーや、根本敬、中原昌也、宇川直宏、地引雄一、等の装丁、デザイン等を手掛ける。季刊誌「TRASH-UP!」に根本敬氏と共作で実験アート漫画「ソレイユ・ディシプリン」を連載中。また、Winston Smith、KING JOE等と共作展、美術館、ギャラリー等で個展、グループ展に参加。11年、Winston Smithとの作品集『221dolls』を発売。サンフランシスコでの単独個展「TOKYO POP!!」を開催。ブックデザイン、DVD・CDジャケットデザイン、広告、アパレル、イベント企画、その他無差別(無意識)に様々な媒体で活動。

<http://www.erec-magazine.com/home/>



## スケートシング

東京都出身。2011年アパレル・レーベル「C.E」を菱山豊、トビー・フェルトマンらと設立。2011年8月イギリス・ロンドンでエキシビションに参加。ロンドン暴動のため来場できないなどお客さんのキャンセルが相次いだ。



## いすたえこ [NNNNY]

デザインユニットNNNNYのメンバーとして、紙、WEB、プロダクツ問わず活動中。見て、触って、嗅げる、物理世界の店舗 = PHYSICALTEMPO 店長。

<http://www.nnnny.jp/>

<http://p-tempo.posterous.com/>

## 2011年11月、渋谷「UPLINK X」にてケネス・アンガー『マジック・ランタン・サイクル』公開決定。

### UPLINK X “ラウンジ・シネマ”シリーズVol.2

快適なラウンジ空間でドリンク片手に、ケネス・アンガーの圧倒的な映像イメージを楽しもう。『マジック・ランタン・サイクル』全作品を一挙上映!

渋谷「UPLINK X」  
Tel. 03-6825-5503 / <http://www.uplink.co.jp>  
東京都渋谷区宇田川町 37-18 トツネビル 2階



### ケネス・アンガー マジック・ランタン・サイクル

発行日: 2011年8月27日

発行人: 浅井隆

編集人: 駒井憲嗣、倉持政晴

アップリンクスタッフ: 示村敦子、大森明美、鎌田英嗣、露無栄、新井正晃、平井淳子、大場小麦、藤井裕子、村井卓実、梶原真理、松田直樹、桑谷聡、隅井直子

題字: 鈴木ヒラク

デザイン: 河村康輔

お問い合わせ: アップリンク

〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町 37-18 トツネビル 2階

TEL:03-6821-6821 / FAX:03-3485-8785

film@uplink.co.jp / <http://www.uplink.co.jp>